

## Ⅲ 専門家委員会による外部評価

## 1. 年度末活動評価 —プロジェクトの外部評価として—

### 専門家委員会委員 ○委員長

- 角 美奈子 公益財団法人がん研究会がん研有明病院放射線治療科 副部長  
井上 智子 東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科 教授  
洪 愛子 公益社団法人日本看護協会 常任理事  
立崎 英夫 独立行政法人放射線医学総合研究所REMAT医療室 室長  
甲斐 倫明 大分県立看護科学大学人間科学講座環境保健学研究室 教授

### 平成 27 年度総括報告会

日時：平成 28 年 2 月 5 日（金） 14:00～17:20

場所：弘前大学大学院保健学研究科 大会議室

1. 開会の挨拶
2. 各部門活動報告 座長 角 美奈子 委員長
  - ・継続事業強化・推進部門 齋藤 陽子
  - ・高度実践環境教育部門 西沢 義子
  - ・放射線リスクコミュニケーション教育部門 木立るり子
  - ・グローバル人材育成部門 中村 敏也
3. 専門家委員による講評
  - ・角 美奈子 委員長
  - ・井上 智子 委員
  - ・立崎 英夫 委員
  - ・甲斐 倫明 委員
4. 閉会の挨拶

## 1) 各部門の活動報告に対する講評

### 継続事業強化・推進部門の活動について

#### ◆角 委員

- 継続事業強化・推進部門は、学部・大学院・現職者教育の継続と改善および、緊急被ばく医療人材育成プロジェクト現職者研修を担当してきた。総括報告でも6回目となった現職者研修および福島災害医療セミナー in 弘前 2015 の概要が報告されたが、内容の充実が理解でき継続によりさらにプログラムの深化が期待されることより、これらの活動は何らかの形で今後の継続が望まれる。
- 被ばく医療教育に関して弘前大学は青森県および東北のみならず、わが国ではリーダー的立場にある機関であり、その役割は今後ますます大きくなることが期待される。放射線災害・医科学研究拠点としての広島大・長崎大・福島県立医科大学の役割とも異なるこれまでの教育システム構築を活かし、大学全体のバックアップによりさらに拡大推進いただくことが望まれる。

#### ◆井上 委員

- 医療人材育成として、現職者（看護と放射線）への研修報告であるが、参加者も継続的に確保されており、研修内容も年々洗練されている。参加者の事後評価も高い。
- これまでの研修実績を基に、恒久的なプログラムとして有料化も視野にこれからも継続されることを望む。

#### ◆立崎 委員

- 被ばく医療のスタッフはまだ十分とはいえず、教育研修は引き続き重要である。
- 原子力災害医療・総合支援センターとして、他県での派遣チーム育成も期待されており、限られた資源の中でさらに充実して頂きたい。
- 医療分野の訓練参加等に関して、青森県との連絡を密にして、有事の対応に関して、県の計画と整合し、弘前大学の持つ能力が有効に活用できるようにして欲しい。また、これに対応して、大学内での位置づけも整理することが、学内で評価されるためにも有効と思われる。
- 福島県立医大と協力してのセミナーは、有益であり、継続されることが望ましい。

#### ◆甲斐 委員

- 平成27年度の事業で注目されるのは、福島災害医療セミナーである。福島医大との共催で進めているセミナーであり、今後、どのように継続発展させていくかが検討課題としてある。
- 弘前大学は、青森県内の研修機関としての意識ではなく、全国の診療放射線技師および看護職を放射線教育の研修できる機関として発展できるような体制を整備すべきである。従

来、これは放射線医学総合研究所が役割を担っていたが、組織の改編によって難しい状況にあり、弘前大学が研修機関としての役割をもつことが期待される。

### 高度実践看護教育部門の活動について

#### ◆角 委員

- 高度実践看護教育部門は、大学院博士前期課程に放射線看護高度看護実践コースを立ち上げることを目的に活動がなされ、平成 27 年 4 月より 3 名の学生を受け入れ教育が開始されている。日本看護系大学協議会高度実践看護師教育の分野特定が決定し、長崎大学・鹿児島大学とともに教育課程の構築が開始される段階となり本プロジェクトの成果として、高く評価したい。
- 放射線看護高度看護実践コースを発展させるためには学生教育の充実とともに、修了後の活動状況の把握と支援が重要と考えられる。修了生の活動内容が CNS 分野申請に直結することや、被ばく医療教育における弘前大学のみならず長崎大学・鹿児島大学卒業生の今後の活動を考える際に、被ばく医療・放射線看護人材バンクの活動は今後機能させるべき重要なシステムであり、経済的背景を明確にしたうえで長期的に取り組む必要があると考える。

#### ◆井上 委員

- これまでの地道な努力と教育実績から日本看護系大学協議会高度実践看護師教育の分野特定が認定された。このプロジェクトの成果であるとともに、看護高等教育への成果でもある。
- これからも教育課程申請・認定、日本看護協会での分野特定などのハードルはあるが、今回のことは最難関をクリアしたとも言える。
- 今後はさらなる教育実績の蓄積とともに、修了生がこの分野の高度実践看護師として継続的に活躍することが求められる。引き続き期待している。

#### ◆立崎 委員

- 日本看護協会の専門看護師分野特定になったとのことで、これまでの実績や交渉が認められたということであり、歓迎される動きである。
- 今後の教育を通して、現場にアピールできる人材を輩出して欲しい。
- 被ばく医療に関しては、通常業務があるわけではないので、訓練は教育の指導的立場となる役割も期待される。

#### ◆甲斐 委員

- 放射線看護の専門看護師養成教育機関に特定されたことは評価できる。今後、日本における放射線看護の専門看護師養成を推進していく中心の大学として発展することが期待される。
- 放射線看護学会と連携しながら人材育成を行っていくと同時に、「放射線看護」の指定規則

取り入れを通して看護職に放射線看護を浸透させるための努力は評価できる。今後も継続してほしい。

### 放射線リスクコミュニケーション教育部門の活動について

#### ◆角 委員

- 放射線リスクコミュニケーションに携わる専門職・学生および一般市民を対象として、リスクコミュニケーション教育拡大・体制整備を目的とした活動を行ってきた。教材開発の一環として開発された放射線編災害対応カードゲーム教材開発は、本プロジェクトの成果として評価できる内容であり、さらに改良をすすめることで教育拡大への貢献が期待される。
- 医療者のみでなく地域を対象としたリスクコミュニケーション教育の継続は今後も継続・発展は望まれる分野であり、弘前大学の事業として継続を図るとともに、原発立地県および近郊を含めた広域での活動とするための基盤整備を模索していただきたい。

#### ◆井上 委員

- 内容が年々充実してきている。
- 一方でこれらをどのように普及・波及させていくかが引き続き今後の課題であろう。いずれにしても大変重要かつ希少な取り組みで有り、プロジェクトが終了した後も（形を変えて等）継続を期待する。

#### ◆立崎 委員

- 重要な分野であり、引き続き充実した活動を期待する。
- リスクコミュニケーションの教育には、医療分野や放射線分野以外のリスクコミュニケーションの専門家の視点も有用である。活用を検討いただきたい。
- 福島県内の現場の体験も大切なので、浪江の拠点を引き続き活用することが重要である。

#### ◆甲斐 委員

- 災害対応カードゲームの放射線編の開発は興味深い試みである。完成したら、学会と学会誌で報告して、広く認知してもらうことが必要である。
- 医学部以外の学部にもリスクコミュニケーション教育を浸透させ、文理を超えた教育科目として定着していく努力は評価できる。今後も継続してほしい。

## グローバル人材育成部門の活動について

### ◆角 委員

- 若手研究者・学生の交流支援と連携体制構築への人材育成、海外からの参加が可能な教育プログラム整備および留学生受け入れを目標に活動が展開されてきた。限られた予算の中で国際的な活動を展開することには困難な側面も多々あると考えるが、KIRAMS 主催の核テロ対応訓練への参加や国際シンポジウム開催など、プロジェクトにおける活動状況より、研究者間のネットワークが構築され交流が進んでいることが、今後の財産となりさらなる国際交流の展開につながることを期待する。

### ◆井上 委員

- 体験の共有化とともに、グローバルに活躍できる人材育成について、1 年の成果が丁寧に報告された。
- プロジェクトの成果をもとにグローバル化の試みが学部・大学院教育に根付いていくことを期待する。

### ◆立崎 委員

- この被ばく医療の分野では数日以上の短期研修は、国内でも余り実践されていない。大学の知見を活かして、充実したプログラムを提供頂きたい。
- 会議等のイベントの結果を投稿文にまとめていることは評価に値する。

### ◆甲斐 委員

- 人材の国際交流は、弘前大学が目指す人材育成にはなっていないようである。上記の 3 つの部門での若手の人材育成を中心に国際交流を進めてほしかった。
- 韓国の KIRAMS の合同訓練参加は人材育成の点からも重要な取組みであり、今後の発展が期待される。

## 2) 各委員からの総評

### ◆井上 委員

- 大学・研究科が一体となりプロジェクトに取り組んだことがよく伺えた。
- 放射線医療、放射線被ばくへの対応は、どこの大学でもできることではなく、また弘前大学のこれまでの放射線に関する研究・教育研修実績が基盤となったが故の成果であろう。
- プロジェクト終了後の大学の自助努力による継続が求められる時代ではあるが、このプロジェクトこそ形はどうあれ何とか継続してもらいたいと願う次第である。

### ◆立崎 委員

- 個々の活動自体有意義のものが多く、国内視点でも大事なプロジェクトである。他の形で

継続できることが望まれる。その方策として、学内の仕組みに関連づける、組み込む、あるいは他の仕組みを見つける必要がある。

◆甲斐 委員

- これまでの活動が評価された結果、大学の副学長が被ばく医療担当を総括することになったことは大きな成果であろう。本プロジェクトが終了したことで、予算が必要として取り組みは難しくなるであろうが、各部門の取り組みは弘前大学のアイデンティティを構築していくものでもあると考えられるので、大学の取り組みとして継続発展していくよう期待している。

### 3) 活動に対する総括的な提言

高度実践被ばく医療専門家委員会委員長 角 美奈子

弘前大学ではさまざまな被ばく医療に関わる研究、教育が行われている。平成19年6月より保健学研究科において緊急被ばく医療に関わる人材育成に向けた取り組みが行われてきたが、平成20年度より医学部・医学研究科・保健学研究科・附属病院の連携による“緊急被ばく医療支援人材育成及び体制の整備”事業がスタートした。高度実践被ばく医療人材プロジェクト(以下、本プロジェクト)は、福島原発事故への対応・支援を通じ明らかとなった、高度かつ専門的な判断力と実践力を備え、統括的に問題解決できる被ばく医療の専門家の不足に対応すべく事業を展開してきた。

本プロジェクトにおける事業の目的としては、これまで整備を進めてこられた被ばく医療教育体制を基盤として、今後の緊急被ばく医療に対応できる医療者及び適切な放射線リスクコミュニケーションの指導を担う人材の底辺拡大を行うとともに、より高度で実践的な緊急被ばく医療人材育成プログラムを開発し、日本学術会議の提唱する国際標準に準拠した高度実践看護師等を視野に入れた“グローバル”な被ばく医療人材育成の拠点を形成することが示されている。

平成27年度の各部門からの報告に対し、以下のごとく総括し提言する。

①継続事業強化・推進部門は、6回目となった現職者研修および福島災害医療セミナー in 弘前2015の概要が報告され、内容の充実とともに継続によるプログラムの深化への期待が示された。福島災害医療セミナーの開催及び現職者研修については今後は地域のみならず、全国的な研修機会の提供など発展的な継続が望まれる。

②高度実践看護教育部門は、大学院博士前期課程に放射線看護高度看護実践コースを立ち上げることを目的に活動がなされ、教育が開始されている。日本看護系大学協議会高度実践看護師教育の分野特定も決定し、長崎大学・鹿児島大学とともに教育課程の構築が開始される段階となっている。今後修了生の継続的活動を支援するとともに、看護職に放射線看護を浸透させ訓練などに際しては指導的役割を発揮し、組織の中での位置づけを確立することが

必要と考える。

③放射線リスクコミュニケーション教育部門は、放射線リスクコミュニケーションに携わる専門職・学生および一般市民を対象として、リスクコミュニケーション教育拡大・体制整備を目的とした活動を行ってきた。教材開発の一環として開発された放射線編災害対応カードゲーム教材開発など教育拡大への活動とともに、リスクコミュニケーション教育を行っている。医療分野・放射線分野以外のリスクコミュニケーションの専門家の視点の活用を図り、リスクコミュニケーション教育の継続、普及を進めていただきたい。

④グローバル人材育成部門は、若手研究者・学生の交流支援と連携体制構築への人材育成、海外からの参加が可能な教育プログラム整備および留学生受け入れを目標に活動が展開されてきた。KIRAMS 主催の核テロ対応訓練への参加や国際シンポジウム開催など、国際交流を進めている。これまでに築かれた研究者間のネットワークを活用した、研修や学会参加を含む国際交流継続の手段を検討する必要がある。

本プロジェクトで構築されたシステムおよび研修・教育体制は弘前大学の事業として、また新たなプロジェクトの中で発展的に継続されることで、被ばく医療支援人材育成及び体制整備に貢献することが期待される。